

ラトビア（2025年度）

- [国・地域別情報トップページへ](#)
- [各国・地域情勢](#)
- [在ラトビア日本国大使館](#)

1. 2024年度日本語教育機関調査結果
2. 日本語教育の実施状況
3. 教育制度と外国語教育
4. 学習環境
5. 教師
6. 教師会
7. 日本語教師派遣情報
8. シラバス・ガイドライン
9. 評価・試験
10. 日本語教育略史

1.2024年度日本語教育機関調査結果

初等教育			中等教育			高等教育			学校教育以外			全体の合計		
機関数	教師数	学習者数	機関数	教師数	学習者数	機関数	教師数	学習者数	機関数	教師数	学習者数	機関数	教師数	学習者数
0	0	0	1	1	45	1	3	55	1	3	30	3	7	130

（注）2024年度日本語教育機関調査は、2024年9月～12月に国際交流基金（JF）が実施した調査です。また、調査対象となった機関の中から、回答のあった機関の結果を取りまとめたものです。そのため、当ページの文中の数値とは異なる場合があります。

[「海外日本語教育機関調査」のページへ](#)

2.日本語教育の実施状況

全体的状況

沿革

ラトビアにおける日本語教育は、日本語通訳・翻訳者であるエドガルス・カッタイ氏が、1987年に国立ラトビア大学外国語学部の講義室を借りて、日本語コースを開始したことに始まる。同コースは、夜間に学習を希望する社会人及び学生を対象としていたが、その後も社会人を対象として地道に続けられた（2011年3月に廃止）。さらに、同コースに在籍した知日家のブリギッタ・クルーミニャ女史が、1990年に日本語夜間塾を独自に開塾した。同塾は主に子どもを対象としていたが、中には学生、社会人も見られた。同塾は1993年9月からリガ市の公立の全日制「日本語文化学校」に昇格した。

1996年に、ラトビア大学外国語学部東洋学科に日本語コースが設置され、日本語文化学校の卒業生のための

進学を受け皿となった。その後、同コースは 1999 年 9 月より日本学プログラム (The Bachelor Program of Japanese Studies) と改名され、2000 年 8 月から同大学の外国語学部は現代言語学部に、2006 年から東洋学科はアジア学科に名称が変更され、更に学部の統合により 2010 年度以降、人文科学部アジア学科となっている。

1999 年、クルーミニャ女史は日本語文化学校を離れ、新たに私立の日本語塾「言語」を設立。

2001 年 9 月には、日本語文化学校はリガ市の学校再編のため統廃合となり、「リガ文化学校」と名称変更した。

2004 年、ラトビア文化アカデミー附属ノルディックセンターに日本語講座が新設された。その後、「ノルディスティカ」として独立し不定期に開講していたが、現在は廃止。2016 年には、ラトビア文化アカデミーの東アジア異文化コミュニケーションプログラムの学生を対象に日本語の 3 年間の学士プログラムを選択することができたが、現在は他の国に焦点を当てたプログラムが行われている。

背景

外国語習得の有用性は広く認識されており、親日感情を背景として、子どもに日本語を学ばせたいと考える親も少なくない。

ラトビアにおける日本語学習熱は、主にラトビア人による俳句集の翻訳 (1980 年代ラトビアで発刊) が火付け役となっている。また、ラトビア国民の間では、日本の伝統武道 (空手、合気道、柔道など)、食、自然に対する関心が高い。一般的には日本の高水準の技術や伝統文化といった対日イメージが、親日感情の基礎になっている。

特徴

日本語は特殊語の一つとして扱われ、他の外国語 (特に英語、フランス語、ドイツ語) と比較すると学習者の数は少ないが、年々希望者が増えている。学生のみならず一般市民の間でも日本語学習に対する関心が高い。

学習動機としては、日本の文化・伝統への関心、日本語そのものへの語学的興味などであるが、アニメ・マンガなどの日本のポップカルチャーへの関心から日本語を学習し始める人が増えてきている。

問題点としては、英語のように日常的に使用する機会は少なく、また、日系企業の進出が少ないことから、日本語を使う就職先を見つけるのは難しく、日本語の習得を活かせる場が非常に限られているということである。また、日本語能力試験がラトビアで受験できないため、学習到達度を把握することが難しい。

最新動向

ラトビアにおける日本語学習者の学習目的も多様化しており、中でも、漫画やアニメなど、日本のポップカルチャーをきっかけに学習を始める若年層が多い。UniCon というイベントが 2013 年からコロナ禍を除き毎年開催され、漫画やアニメの他、コスプレを中心に盛り上がりを見せている。

また、2002 年より毎年 1 回日本語弁論大会が開催され、日本語学習者が日頃の学習成果を発表する場となっている。

2022 年 10 月からは、(日本へ留学経験もあり長年日本語を学んでいる) ラトビア国立図書館の館員の声かけにより、月に一度、当地で日本語を学んでいるラトビア人と在留邦人が同図書館の一室に集まり、『日本語会話クラブ』と称する、日本語で会話を楽しむ会が開催されている。

一方、現在のラトビアにおける日本語教育を巡る問題点は、日本人教師が極めて少ないことである (ラトビア

大学とりが文化学校に1名ずつ)。今後、何らかの理由で日本人教師が退職した場合、日本人教師は一人もいなくなり、日本語教育を終了せざるを得ない状況にある（そのほかの日本語教育機関（講座）では、いずれも外国人教師が教授している）。

教育段階別の状況

初等教育

日本語教育の実施は確認されていない。

中等教育

ラトビアには、教育科学省で定めた正規の科目の他に、選択科目を特別に教えている公立学校がいくつかある。その選択科目として唯一日本語を教えているのがリガ文化学校（10学年から12学年）である。ここでは第3外国語として日本語が教えられている（4時間/週）。日本語熱の高さは、漠然とした日本への関心が親の世代のみならず子どもの間にも浸透していることの現れである。

高等教育

1997年には、ラトビア大学に日本語学科が開設されたが、1999年には日本学コースに再編された。日系企業の進出が少ない状況のため、日本語を使う仕事に就くのは難しいが、それにもかかわらず入学希望者は多い。同学科の入試科目に日本語はない。日本の文部科学省、大学間のプログラムなどで、毎年数名の学生が日本に留学している。早稲田大学、関西外国語大学、関西学院大学、筑波大学、山形大学、国際教養大学、文京学院大学、北海道大学、徳島大学、神奈川大学、兵庫教育大学、名古屋外国語大学大学との間において、大学間協定を結んでいる。

学校教育以外

リガ市では一般向けの日本語講座が3か所ある。1999年の秋に開設された私立の日本語塾「言語」（週3～4回、約30名）の日本語・文化コース、2019年夏に開設された私立の日本語塾「YUME Academy」（生徒約90名）、私立学校「Elizabetes Āgenskalna Private Secondary School」で2020年10月に開設された日本語クラス（約12名）である。別途、オンラインに限定されるが、一人のラトビア人が中心となって設立した「REI」という、一般向けの日本語講座が2022年より存在する。また、独学か個人教師などについて、個人的に日本語を学習している人はかなりいると思われるが、正確な人数は把握できない。

3.教育制度と外国語教育

教育制度

教育制度

6-3-3制。

基礎学校（日本の小学校、中学校に相当する）は9年間で、1年生から6年生までの「第1段階」（7～13歳）

と、7年生から9年生までの「第2段階」（13～16歳）に分けられる。中等学校（日本の高校に相当する）は3年間（16～18歳）。高等教育機関は、大学（3年間）、カレッジ、アカデミー、技術短期大学（2～4年）、職業専門学校（2～3年間）など。

義務教育は5歳から16歳（日本の幼稚園（2年間）から中学校3年までに相当する）までの11年間。

教育行政

初等、中等、高等教育機関のほとんどが教育科学省の管轄下にある。

言語事情

国語（公用語）はラトビア語。

憲法は、ラトビア語が唯一の「公用語」である旨定めている。他方、総人口の約36%の比重を占めている他民族の永住者（ロシア人、ベラルーシ人、ウクライナ人など）の間では、主にロシア語が使用されており、国民全体に占めるロシア語を解する人々の割合は非常に高い。

2022年9月、同年2月のロシアによるウクライナ侵攻を受け、国会でラトビア語のみによる教育への移行を規定した改正教育法が可決され、25年9月からは初・中等教育の語学以外の授業はラトビア語のみで実施されている。

外国語教育

一般的には1年生で開始され、第一外国語は原則として英語（必修）。

4年生で第二外国語をロシア語、ドイツ語、フランス語などの欧州言語から選択するのが一般的。

ただし、外国語教育に重点を置く傾向がある学校では、小学1年生より外国語教育が開始されている。こうした学校は、英語、フランス語、ドイツ語、北欧諸国語などをそれぞれ専門とし、第一外国語としてそれらの言語が教えられている。また多民族国家であることから、民族学校が多数あり、ポーランド語、ウクライナ語、エストニア語などで一部の授業が行われている。

2022年11月、ラトビア教育・科学省が12学年までは第二外国語の学校教育をEUの公用語又は教育分野の国際条約により定められている言語に限定し、その規制を2026年9月から始めることを計画中である旨発表した。2025年5月27日、内閣はこの規制を概ね承認した。ついては、2026年9月1日から教育機関は中等教育プログラムにおいて、第二外国語の学校教育をEUまたはEEA加盟国の公用語、又は教育分野の国際条約により定められている言語に限定して提供する。

外国語の中での日本語の人気

日本語は特殊語の一つとして扱われ、他の外国語（特に英語、フランス語、ドイツ語）と比較すると学習者の数は少ないが、学生のみならず一般市民の間でも日本語学習に対する関心が高い。他方、日本語と並ぶのが中国語であり、孔子学院による講師の派遣や教材の支給など、教育支援が充実している。また、2016年には韓国の世順学堂がリガ市に設立されており、韓国文化の人気の高まりの中で、韓国語学習者の増加も想定される。今後、日本語学習を実施する各教育機関に対する支援の拡充を行わなければ、後れを取ることが懸念される。

大学入試での日本語の扱い

大学入試で日本語は扱われていない。

4.学習環境

教材

初等教育

日本語教育の実施は確認されていない。

中等教育

10年生から『みんなの日本語』スリーエーネットワーク（スリーエーネットワーク）を用いた文法の学習と話すことに重点を置いた授業を交互に行っている。

高等教育

初級のコースでは、『初級日本語 げんき』坂野永理ほか著（第3版）、中級以降では、『4技能で広がる中級日本語カルテット1』（ジャパントイムズ）や『上級へのとびら』岡まゆみほか（著）とその副教材『これで身につく文法力』と『きたえよう漢字力』を用いている。その他、JLPT N4 から N3 を副教材として用いている他、教材購入助成金を活用して購入した教材を適宜レベルにアレンジして併用している。

学校教育以外

主に、教師が独自に開発した教材を使用している。

IT・視聴覚機材

初等・中等教育機関においては、インターネット、コンピューターを授業において、例文提示、文化事例、時事問題などの紹介で使用することがある。

大学においては、教育機関用のクラウド・プラットフォームに、教師が作成した教材などの共有、または学習ツールなどの情報を共有したりしている。

5.教師

資格要件

初等教育

日本語教育の実施は確認されていない。

中等教育

ラトビアの教員資格に準じて、大学で日本語教育教員養成課程を履修・修了していること、日本語教育能力検定試験に合格した者、これらと同等以上の能力があると公的に認められる者。

高等教育

修士号（取得場所は問わない、専門は日本語教育または日本語学）

学校教育以外

特に日本語教師としての資格要件はない。

日本語教師養成機関（プログラム）

日本語教師養成を行っている機関、プログラムは確認されていない。

日本語のネイティブ教師（日本人教師）の雇用状況とその役割

2026年1月現在、ラトビア大学に1名、リガ文化学校に1名の日本人教師が雇用されている。

教師研修

現職の日本語教師対象の研修は確認されていない。
訪日研修としては、JFの日本語教師研修がある。

6.教師会

日本語教育関係のネットワークの状況

2003年にラトビア日本語教師会が発足したが、2026年現在は解散し、日本語教育関係のネットワークは確認されていない。（具体的な解散時期は不明確。）

最新動向

特記事項なし。

7.日本語教師派遣情報

国際交流基金からの派遣

JF からの派遣は行われていない。

その他からの派遣

2014 年より（コロナ禍を除き）、山形大学の生徒グループが例年ラトビア大学へ派遣されている。約 2 週間の派遣期間の中で、山形大学の生徒が自由な発想で日本語を教え、その過程で深い交流を育むプログラムである。相手側大学や学生との事前調整も含め、学生主導であることが特徴。漫画通読、浴衣の着付け、カードゲームなど、内容は厳密に「日本語の授業」ではないが、当地では期待値の高い派遣事業である。

8. シラバス・ガイドライン

統一シラバス、ガイドライン、カリキュラムは確認されていない。

9. 評価・試験

共通の評価基準や試験は確認されていない。

10. 日本語教育略史

1987 年	国立ラトビア大学外国語学部の講義室にて夜間、社会人及び学生を対象にエドガルス・カッタイ氏が日本語コース開設
1991 年	ブリギッタ・クルーミニャ女史が子どもを対象に日本語夜間塾を独自に開塾
1993 年	クルーミニャ氏による夜間塾がリガ市の公立の全日制日本語文化学校に昇格
1997 年	ラトビア大学外国語学部東洋学科に日本語コース設置
1999 年	同日本語コースを日本学プログラム（The Bachelor Program of Japanese Studies）と改名 ブリギッタ・クルーミニャ女史が日本語塾「言語」を設立
2000 年	ラトビア大学外国語学部が現代言語学部に改称 ブリギッタ・クルーミニャ女史によるラトビア語・日本語辞典刊行
2001 年	日本語文化学校がリガ市の学校再編のため統廃合となり、リガ文化学校と名称変更

2002年	ラトビア日本語弁論大会の実施を開始
2003年	ラトビア日本語教師会が発足（その後解散）
2004年	ラトビア文化アカデミー附属ノルディックセンターに日本語講座 新設（その後廃止）
2006年	ラトビア大学現代言語学部東洋学科がアジア学科に改称 ブリギッタ・クルーミニャ女史による和良学習漢字辞典を発行 ラトビア大学にて一般公開講座開講（現在休講中）
2010年	ラトビア大学現代言語学部が統合により人文科学部に改称、アジア 学科は変更なし
2011年	エドガルス・カッタイ氏が開設した日本語コース休講
2016年	ラトビア文化アカデミーのラトビア・東アジア異文化コミュニケー ションプログラムに日本語講座追加（2019年に終了）
2022年	日本語を学ぶラトビア人と在留邦人による『日本語会話クラブ』開 始

情報更新についてのお願い

この国の日本語教育に関する情報がありましたらお知らせくださるようお願いいたします。
なお、内容の確認のため、こちらからご連絡する場合があります。

Eメール：kunibetsu@jpf.go.jp

（メールを送る際は、全角@マークを半角@マークに変更してください）